

## 4. 地域包括ケアシステムにおける大学病院看護部の役割

岡山大学病院 副病院長 看護部長  
前川 珠木

当院は岡山市に位置する特定機能病院であり、急性期医療を担っている。看護提供体制は入院基本料7:1をとっており、全職員数の約4割を看護職員が占めている。100床あたり看護職配置数は全国国立大学病院中1位（平成26年度時点）だが、潤沢に人材を配置できていると実感できる日は一年のうちでもさほど多くはない。病院経営の安定化のため病床稼働率の維持は必須であり、短い入院期間で次々と患者さんを送り出す毎日ではあるが、看護職員はできるだけ患者さんにご家族に寄り添いたいと願っている。

急性期医療においては、看護職には、日々刻々と変化する患者さんの状態を見落とすことなく的確に観察・評価し、そのセルフケア能力を引き出す力が求められる。加えて、スムーズな在宅療養への移行を目指した退院支援力も求められる。患者さんの生活上の問題を中長期視点で捉える力は、急性期の現場においてはかなり意図しないと身につかない。退院支援や地域連携に必要な知識を学び、入院から退院という移行期における援助のあり方を考えることを目的に、当院では保健学科看護学専攻、岡山市内の訪問看護ステーションの協力を得て、平成20年度から退院支援・継続看護研修を行っている。受講対象は中堅クラスの看護職員であるが、大学病院の臨床看護の視点に在宅看護の視点を加えた、複眼の視点で患者さんの生活をとらえる力が徐々にあがっているが着実に付いてきている。

今後、岡山県地域医療構想がどういった形で具体化されるのか、急性期病床が乱立していると言われる岡山市の急性期病床がどういった形で収斂されていくのか、その議論が展開されていくことになる。今、この時代に急性期医療機関に身を置く者の第一義は力量を持った看護職を育成し、患者さんが退院したその日から困ることのないようにケアを提供する事であると考えている。また、一事例、一事例を通じた連携から地域の持つ力やほころびを見出し、専門職として地域医療構想へ参画することが求められている。